

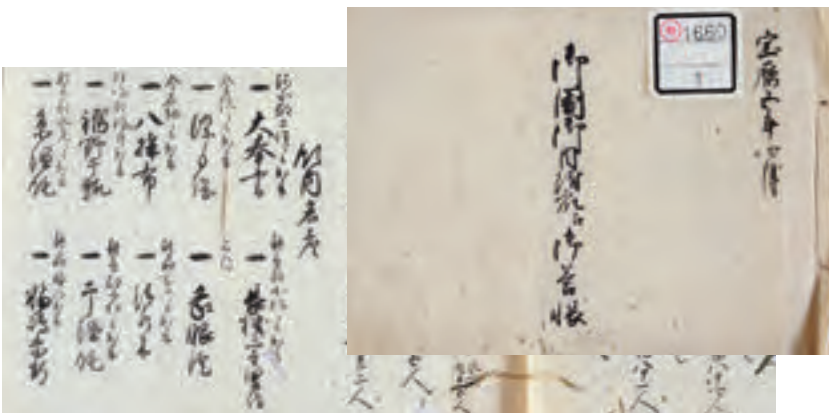
# 小松町の諸産業

寛永十七年（一六四〇）三代藩主前田利常が小松に隠居した際、利常付の家臣約四〇〇名とその家族も移り住んだ。同時に武士や町人の需要に応える商人や職人も集められ、町は大きく発展していった。小松町は能美郡で最大の町であり、早くから魚問屋、茶問屋、塩問屋など各種の間屋が設置され、能美郡における流通の拠点でもあった。

小松町の繁栄ぶりは、文化十年（一八一三）「小松町家数産物諸商売等調理帳」（永甫家文書）により窺い知れる。これによれば、家数は、本町が一、三〇二軒、散町が四六〇軒、合計一、七六二軒を数え、絹紬等織立一五〇軒・絹屋方仕事手間取人三三四軒・糸絹仲六〇軒など絹商売関係が五五五軒、その他批・雑穀が併せて一一六軒、酒・

醤油・味噌・酢などの醸造関係が四〇軒、小間物・古道具・古手物・荒物が併せて三二四軒、鍛冶関係七九軒、大工・大工細工人・船大工など、大工関係一三九軒と、多種多様の商売人や職人がいたことがわかる。

中でも絹商売関係が五五五軒にもものほり、実に小松町の諸商売の三二％の者が絹商売関係に携わっていたことになる。最盛期には一〇万疋もの生産高があり、また、藩主用の御召絹も生産するなど、文字通り「所方第一之産業」「当町随一之産業」として発展していた。絹織物は、『廻国雑記』に見えるように中世以来行われ、利常の保護奨励により一層盛んになった。寛永十四年に絹道会所を設置し、絹道組頭・絹肝煎・絹改人などの役人が、絹問屋、



宝暦5年(1755) 御国御目付衆之御答帳(金沢市立玉川図書館 加越能文庫) 領内の名産として小松の絹と干鰯が書き上げられている

文化10年 小松町諸商売一覧

織維関係	(軒)	生活関係	(軒)	桶屋やね葺板批人	22
絹紬等織立	150	油	4	鍬から	8
絹屋方仕事手間取	334	たもの実油	1	木履	25
呉服	8	油請	9	左冠	4
糸絹仲	60	蠟燭	14	木挽	20
糸問屋	7	荳粕油粕干鰯	26	塗師細工	11
より糸賃取	4	薬種	6	箆細工	7
着類仕立物	12	合薬	9	笊籠細工	13
紺屋	19	小間物紙類	68	箕細工	11
紺屋細工	25	古道具はがね	142	曲物細工	3
小計	619	古手物	68	鋳物師	1
		荒物	46	量刺	7
食品関係	(軒)	鍋	9	小計	476
酒	11	鍋鑄懸等細工	17		
魚問屋	1	椀折敷類	6	その他	(軒)
魚鳥	67	瀬戸物	5	遺物	36
塩肴	23	傘提灯張	5	蔵宿	3
豆腐	7	たばこ	50	旅籠屋	15
饅頭麩麹蒟	15	たばこ賃切	15	質屋	24
醤油	8	葉茶	5	両替銭	31
味噌	15	葉茶買出人	29	両替銭中買	19
酢	6	小計	534	馬借持	23
塩小売	19			舟持	14
八百物	9	職人関係	(軒)	鬻付	17
批	56	鍛冶	65	風呂屋	10
雑穀	60	鍛冶細工	14	手習指南人	4
米仲	24	材木	11	奉公口入人	12
温飩	7	炭	45	髪結	37
干菓子	6	石	7	本道医師	11
生菓子餅	7	大工	97	鍼立	9
飴	12	大工細工人	39	按摩取	10
室	18	船大工	3	座頭	1
小計	371	石伐	13	橋場御用	25
小松町家数	1,762軒	量表呉座縁取	38	小計	301
		表具師	12	合計	2,301

註 「小松町家数産物諸商売等調理帳」(永甫家文書)より作成。

絹伸買らの裁許と共に、絹織物の生産・集荷、販売の監視、品質の統制などに当った。生産量は、慶安・承応の頃が最盛期で一〇万疋、寛延頃は六・七万から八万疋、文政初期で五万疋などとなっている。当町随一の産業であ

った絹業も文政期ころより次第に衰退していった。その打開策として、今まで京都の絹問屋に送っていた小松絹を江戸に送り、新たな販路の拡大を図ったが成功しなかった。さらに絹道会所を廃止し、絹商売を自由に行わせるな

ど産業の復興に努めたが、衰退の歯止めにはならなかった。  
 宝暦五年(一七五五)「御国御目付衆御答帳」(加越能文庫)に、小松の特産として絹と並んで干鑑飩うとんが書上られている。この干鑑飩はいつごろから作られていたかは不明であるが、藩主の御膳御用や御進物用として作られたものであり、元禄の頃は八日市町亀屋徳右衛門が御用を勤めていた。(袖吉正樹)



嘉永3年(1850) 絹判押札 表(右)裏(左)(鈴木一雄氏所蔵)